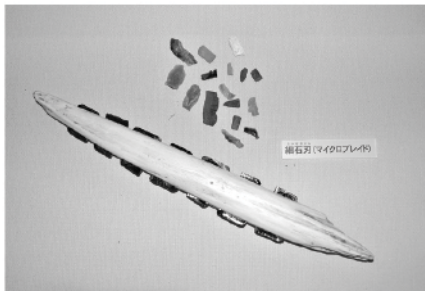


## 考古－5 <sup>しよくじん き</sup>植刃器復元模型



動物の骨や角などで作った軸に溝を掘り、石を打ち欠いて作った薄い石器（<sup>さいせつき</sup>細石器）を直線状にはめこんで作られた道具を植刃器といいます。弓矢がまだなかった石器時代の終わりに狩りの道具である槍の刃部としても使われていました。使用後、刃の欠けた部分だけ簡単に置き換えることができ、当時としては画期的な道具だったようです。植刃器の刃の部分、<sup>しらたき</sup>細石器はその作成技術が地域によって違いがあることから、<sup>やでがわ</sup>白滝型、矢出川型、福井型などいくつかのタイプに分けて呼ばれていますが、宮崎県ではその中でも九州地方東南部に特徴的に分布する型と同じ新富町<sup>うねわら</sup>畦原から出土した畦原型と、佐土原町<sup>ふなの</sup>船野遺跡から出土した船野型があります。